

黒澤隆文『近代スイス経済の形成—地域主義と高ライン地域の産業革命—』
(京都大学学術出版会、2002年2月、vii+565[本文517]頁)」を読んで
渡邊 尚

2002(平成14)年3月31日(日)

箱根 宮ノ下温泉 KKR宮ノ下

ながらく空白のまま残されてきたスイス経済史研究に、突如出現したアルプスのごとき山容をもって迫るこの画期的大作が、記念すべき経済空間史研究会の第一回例会の直前に上梓されたことは、望外の回り合わせというものである。しかも、方法論的に原経済圏概念の精緻化と整合化とを目指すこの労作を合評できるのは、原経済圏概念の提唱者として感無量である。私は当日、合評のための論点提示を次の8節に分けて行ってみた。

- 一 総評[高ラインに跨る原経済圏の検出と国民経済論の完膚無き批判の意義]
- 二 発見されたスイス[スイスに対する思いこみの容赦ない修正]
- 三 「原経済圏論」(28-34頁)の検討[(1)論点整理、(2)反批判]
- 四 問題点[12論点。とくに高ライン経済圏とスイス国家領域のずれの解釈]
- 五 概念規定の問題[3論点。「単一性国家」、「国民国家」等の表記の問題]
- 六 表記上の問題[6論点。とくに「アルプス」と「アルプス山脈」]
- 七 「鬼の首」[重箱の隅をはじくる]
- 八 問題提起[注記の際の引用記号の表記法に関する傾聴すべき提案]

紙数の制約のため、本稿では私にとりもっとも重要な論点である三、四、八に絞り、当日の著者の回答や議論、さらに、2週間後の4月15日に京大大学院今久保ゼミで行われた合評における議論を踏まえながら、この間に私が再考したことをも含めて、私の今現在の理解と反批判とを、あらためて提示させていただきたい。

1 「原経済圏」の理解をめぐって

(1) 著者は、概念の応用可能性の低下を避けるため、「基本規定」と「性格規定」とを峻別しなければならないと言う(28-34頁)。これについてはすでに著者と何度か議論をする機会を持ったが、未だに私は納得できない。そもそも「基本」と「性格」という両範疇の区別の論理的根拠が、理解できないのである。私にとり原経済圏概念は産業革命概念と表裏一体であり、さしあたりヨーロッパ産業革命に着目するならば、これは歴史的事実として綿工業の興隆と不可分である。したがって、原経済圏を理念型として構成する立場からは、原商品としての綿(棉)商品は原経済圏の属性であり、これから切り離すことができない。

原商品である綿が、ヨーロッパにとり植民地物産、すなわち非自給財である以上、ヨーロッパは原料供給を全面的に非ヨーロッパ(ヨーロッパ周縁部を含む)に依存せざるをえない。必然的にヨーロッパ経済は非ヨーロッパ経済の支配に向かわざるをえず、己を中核に据えた近代世界経済体制を構築するにいたった。その意味で綿商品は、ヨーロッパ経済史の分析

にとどまらず、アメリカ、アフリカ、アジアをも視野に収めた資本制世界経済史分析にとり、「端緒範疇」の意義を担うものである。

(2) 著者は原経済圏としての高ライン地域を「経済的中核地域」として捉え(384-389, 514-515 頁)、原経済圏の自立性の根拠を「中心性、中核性」に、すなわちこれが資本制経済活動の中心的立地点であることに、つまり投資決定主体(企業的能力と金融機能)の再生産に求める。他方で、境界、外縁はさほど重視されない。このことは原経済圏の空間的安定性とは中心の位置の不動性にほかならず、逆に境界は可変的でありうると著者が理解していることを含意する。しかし、「中核地域」は「中核地点」でなく、相当の広がりを持つ「圏域」のはずである。したがって、「中核地域」が長期にわたり自己再生産を持続することは、「中核地域」の輪郭が安定して存続することにほかならない。このような属性を具える空間は、私の理解からすれば原経済圏ではなく、むしろ「大都市経済圏」に近い。ドイツの事例を挙げれば、ハンブルク市域の中心部の輪郭は比較的安定している。しかしハンブルク大都市圏は結節空間として周辺部を次々に併呑し、長期的に拡大傾向にある。その意味でハンブルク大都市圏は不定形で、その輪郭は不安定である。

これに対して原経済圏の空間構造を、私は今のところ中核部、周囲部、漸移地帯の三層から成るものと考えている(原経済圏の内部空間構造をこれまでよりも明確に意識するようになったのは、まさに本書から受けた刺激によるもので、感謝に堪えない)。このうちもっとも不安定で不定形なのは中核部で、それは産業変動の無窮動とともにアメーバのように伸縮、変形、移動を繰り返す。しかし、中核部の絶えざる変動の対外効果は二重の緩衝空間としての周囲部、漸移地帯によって吸収され、外枠の漸移地帯の位置は比較的安定している。したがって、原経済圏の太い輪郭を描くことが可能となる。このような私の理解が、著者の理解と正反対であることが判ったことは、論点を絞りこむ上で収穫であった。

2 高ライン原経済圏とスイス国民経済圏との位置のずれをめぐって

ずれが政治空間(スイス国家領域)と経済空間(高ライン地域)とのずれであるならば、概念的に理解しやすいが、国民経済圏と原経済圏という両経済空間のずれとされるならば(512 頁)、これの概念的理解はなかなか容易でない。著者の認識は、これまでドイツ経済の歴史的空間構造に関心を集中してきた私の、空間理解の限度を試すものでもある。私は当初、重心の位置をほぼ同じくする制度化された領域的経済空間と制度化されない非領域的経済空間とが、外縁部のずれを伴いながらも、ぎりぎり均衡を保って重なり合っている状態と解釈してみた。しかし今では、いわば政治的投資決定主体である公権力の経済政策に直接に影響を受ける商品群に関わる経済圏と、経済政策から相対的に自立した商品群に関わる経済圏とのずれと解釈する方が、無理がないように思われる。もしこの解釈が妥当であるならば、歴史的産業連関の経路も両者間で異なったものとなろう。

3 注記の際の引用記号の表記をめぐって

時間不足のため残念ながらほとんど議論できないままに終わった問題だが、著者の真摯な問題提起は、経済空間史研究会会員一同が虚心坦懐に受け止めるべきものであると、私は考える。著者は「あとがき」(542-543頁)で、① v 音表記にヴを用いない、② 数字を4桁区切りにする、③ 欧語文献引用に際し、p., S. 等でなく、頁で表記するという、本書の原則をあらためて敷衍している。①については、私自身『ラインの産業革命』以来一貫して実行してきたことだから、心励まされる思いである。②については、私はその都度出版社との闘争を続けてきたが、概して分が悪かった。しかし、間もなく公刊される『日本EU学会年報』第22号掲載の論文では、4桁区切りで作表することに成功した。③の欧語文献注記に関して、私はしばらく前から意識的にラテン語表記で統一するよう努めてきたが(例: ebenda→ibid., S. →p.), 正直のところp. をページ(頁)に変えるふんざりがつかなかった。しかし、著者から指摘されればこれに反対する根拠はないし、またそうである以上、著者に今後とも孤軍奮闘を続けさせるわけには行かない。ただ、ページとするか頁とするかで迷っている。中国でも頁を使っているが、なぜこの漢字がpageの訳語に当てられたのか、いろいろな漢和辞典を調べたが、どうも納得できる説明に見当たらない。そこで中国語の専門家に問い合わせるところである。ページと頁とのいずれを採るかの根拠を見出し次第、切り替えるつもりである。

工業製品の規格化、標準化が工業化の進展に決定的な意義を持つように、論文作成形式の規格化も研究の高度化に無視しえない役割を果たす。もちろんこれにはそれぞれの意見があろうと思われるので、今後とも折に触れて会員間で意見交換を重ね、少しずつ望ましい形式に近づけて行ければと、願っている。

[付記] 以上の原稿を提出した直後に、かねて「頁」の用字法の由来について問い合わせていた知人の尾崎雄二郎京都大学名誉教授から、以下のような返信をいただいた。尾崎教授は中国語学の泰斗であり、角川『大字源』の共編者のお一人である。この貴重なご教示は会員一同が共有すべきものと思われるので、そのままここに引用する。なお、尾崎教授の書信は旧字体で書かれているが、勝手に常用漢字に直した。

「頁は中国で葉と同音に読む謬った読み方が一般的になったときに葉と同じ今のページの意味に使われるようになったと考えていいようです。道光13(1833)年に出た文字学著作中で俗ニ頁(ケツ)ヲ用フ、頁ハ即チ首(オオガオ)ノ字。今ノ音ハ誤ッテ葉(エフ)ニ同ジ。大イニ誤ル。と言っている学者もあります(朱駿聲『説文通訓定聲』)。頁も葉も今ye(イエ)ですが、頁は本当はxie(シエ)であって当たり前なのです。」